

# 諏訪湖クラブニュース NO. 15



もくじ

- 「株式会社 信州みんなの自然エネルギー」の発足
- 信州安曇野・犀川の白鳥たち
- セブ島の子供たちに音楽を！！プロジェクト
- 5人の講演リレー
- 日本水大賞・国土交通大臣賞を受賞しました
- 農の百話47 続・事の本質（故 松井 覺進 様 遺稿）
- 信州環境フェアが行われました

## 「株式会社 信州みんなの自然エネルギー」の発足

会長 沖野 外輝夫

今年は早くから暑くなり、9月になっても、まだまだ暑い日が続きました。会員の皆様にはお元気にお過ごしでしょうか。中高年以上の会員の多い諏訪湖クラブにとっては気がかりな夏でもありました。1937年生まれの私の周辺でも今年に入ってから彼岸に移られる方が目立つようになりましたが、諏訪湖クラブでも私と同年の松井覺進氏が闘病の末、彼岸に旅立たれたとご子息からお手紙をいただきました。懇親会での水問題に対する熱意溢れたお姿が思い出されます。この紙面をお借りして心から哀悼の意を表させていただきます。

冒頭から気弱な話になりましたが、明るい？ニュースもあります。昨今注目されている太陽光を中心とする自然エネルギー関連の諏訪地域での動きがようやく具体的な活動の段階に入ってきました。諏訪湖クラブのエネルギー関連部会の活動は谷辰夫氏を中心とする「諏訪地域エネルギー協議会」から「自然エネルギー信州ネットSUWA」へと発展し、さらに、諏訪地域自然エネルギー情報共有組織である「諏訪地域自然エネルギー普及促進会議」設立と、諏訪地域全体の活動へと発展してきました。これまでは具体的な活動を支えるソフト面での展開でしたが、ようやく諏訪地域の自然エネルギー有効利用に対する具体的な展開へ一歩踏み出すことになりました。その基礎となる住民主体の事業体は「株式会社信州みんなの自然エネルギー」と名付けて、この9月に発足しました。

「株式会社信州みんなの自然エネルギー」の母体は「信州ネットSUWA」ですが、その原点には「諏訪湖クラブ」があります。「株式会社信州みんなの自然エネルギー」の最初の仕事は諏訪湖クラブで提案してきた諏訪湖流域下水道豊田終末処理場の未利用空間（具

体的には水処理浄化槽建屋の屋上等）に太陽光発電施設を設置し、その利益を地域に還元するというプランの実現です。内容的には社会情勢の変化によって多少の変化はありますが、基本的な姿勢に変わりはありません。地域への利益還元という基本的姿勢を貫くために慣れない実業活動への出発がNPOではなく、「株式会社信州みんなの自然エネルギー」の設立という形となりました。会社設立登記に当たって数人の発起人と資本金が必要とのことで、信州ネットSUWAの運営委員を中心として出資者を募り、17名の賛同者を得ました。会社発足後は諏訪湖クラブ会員、信州ネットSUWA会員にも広く賛同者を募り、地域みんなの会社として基礎を固め、目標に向けて進んでいきたいと考えています。その折には物心両面でのご協力をこの紙面をお借りしてお願いしておきます。詳しい内容に関しましては後日改めてご説明させていただきます。

皆様のご家族とご自身のご健康を心から願っています。



豊田処理場浄化槽屋上は現在脱臭用の土が盛られ、草地となっている。この草地に太陽光パネルを設置するとおおよそ1MWhの発電量が得られると計算されている。未利用空間の有効利用と称する理由でもある。

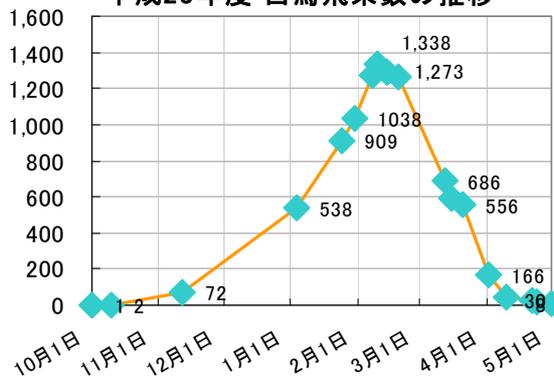
# 信州安曇野 犀川の白鳥たち

理事 八幡 義雄

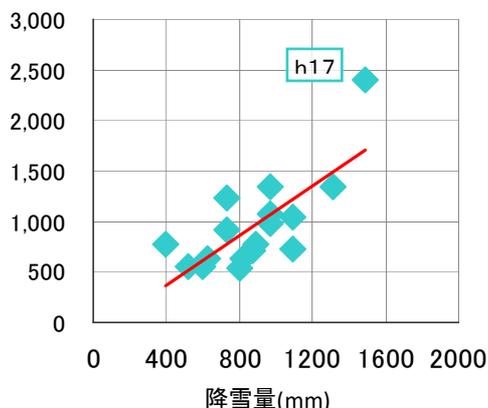
～毎年多くの白鳥が安曇野市犀川に訪れます～

私の職場の近くの安曇野市犀川に、初めて白鳥が飛来して本年度で 27 シーズンとなりました。遠く 4,000 キロ離れたシベリアからやってきて犀川に降り立ち冬を越す白鳥の姿は、いまや安曇野の冬の風物詩となっており、県内外から多くの観光客が訪れます。平成 23 年度も 2 月 10 日が最大で 1,338 羽もの白鳥が訪れてくれ、過去 27 年間で 3 番目に多い年となりました。

平成23年度 白鳥飛来数の推移



降雪量と飛来数の関係



過去の白鳥の飛来数と長野県北部の降雪量との関係をしらべてみましたところ、降雪量の多かった平成 17 年度が一番多く 2,398 羽で、比例関係が見られました。これは、降雪によってえさを確保することが困難となるので南下するようです。

ちなみに、諏訪湖は最南限の越冬地だそうです。

白鳥は、水草など植物性のいろいろなものを食べますが、食べ物をすばやく消化し、効率的に排泄する仕組みができていて、4,000 キロを 1 ヶ月かけて飛んでくるのに適した体をしているそうです。全体に灰色かかった鳥はその年に生まれた幼鳥で、飛ぶ時は先頭が父親で最後部が母親だそうです。

白鳥は、家族愛の強い鳥で、毎年 10 月中旬にやって来ますが、冬を越して北帰行の時は、家族がケガをすると、治るまでまっているので、遅い時は 5 月まで残ってしまいます。

平成 23 年度は、多くの白鳥が飛来してくれましたが、その分ケガをして帰れない白鳥が多く、5 羽も残ってしまいました。これまでは、1 羽でしたので、急増です。

安曇野の白鳥湖で、長年世話をしていて、「アルプス白鳥の会」代表である原とみ子さんに話をお聞きしました。鳥インフルエンザの関係で、一般の人のえさを与えることを制限したため、白鳥は遠くまでえさを求めて飛んでいくのですが、なれない地域に行く時に電線などにひっかけ、翼を傷めてしまうそうです。

そのため、中部電力のほうで、白鳥が飛来するコースに目立つようなカバーを設置してくれました。



あずみ(左)とみちゃん  
あずみは、前年に帰れなかった白鳥で2年越となってしまいました



ノンちゃん  
右翼を骨折しているため歩いての移動です

日本の暑い夏をすごすことになるので心配ですが、昼間は草むらに隠れていて、朝夕の涼しい時は、えさを食べにやってくるそうです。

ノンちゃんとユキちゃんは、明科地区の御宝田遊水池に取り残されていました、白鳥を見守る人たちが、花火大会の音が心理的なプレッシャーになるのを心配して、前日 7 月 9 日に 3 時間に及ぶ捕獲移送作戦で、仲間のいる犀川白鳥湖に移され仲間と合流しました。とりあえず一安心です。

# セブ島の子供たちに音楽を！！プロジェクト

専務理事 長崎 政直

諏訪湖ロータリークラブでは2004年よりセブ島支援を始めました。セブに工場進出したメンバーが現地のロータリアンから古着の提供を依頼されたことがきっかけでした。

フィリピンは2007年の人間開発（幸福度）指数で105位の国です。ちなみに日本は10位ですし、アメリカは13位、中国は92位。最近話題の国民の幸福をめざす（GNH）ブータンは123位です。一国民当たりのGDPは3,406ドル（約30万円）、貧富の格差は14.1倍で、光の部分と影の部分が混在しています。光を象徴するのは世界的に有名なホテルが景勝地に点在していたり、巨大マーケットがあったりといったところでしょうか。影を象徴するのは、周辺の島々から職を求めて移住してきて、職を得られぬままに不法に、海岸や川沿いの空気を占拠し、勝手に小屋をつくって住むスクワーターと呼ばれるスラム地区で40%に近い人々が暮らしています。

わがクラブの奉仕活動はこのスクワーター地区を対象に行われ、食糧・薬品支援、就学前の子供たちに生活習慣を教えるデイ・ケア・センターへの資金援助、井戸掘削や故障井戸の再生プロジェクト（マッチング・グラント事業）、小学校への椅子、下駄箱の提供、校舎壁の塗り替え資材の提供等で、2010年までしてきました。

6年余の援助を続けてきて振り返った時、この援助がいつまで続けられるだろうか、この援助で良いのだろうか、追従笑いをして支援物資に集まってくる大人たちはこの援助では自立に向かわない、スクワーターからの脱出はできないと考えました。しかし、そこに住むキラキラとした眼差しの子供たちが無気力な大人になっていくのは悲しいことです。この子供たちの自立に向けた何かをしたいと考えるようになりました。教育のお手伝いをしよう、セブ島の子供たちに音楽を！！プロジェクトの始まりです。

日本の小学校では鍵盤ハーモニカが使われていますが中学校ではもう使われません。「もったいない!!」セブ

で使うことができないかとある会員が思いつきました。セブ島の小学校に持ち込み試してみると好評で、取り入れてくれることになりました。既に600台の古鍵盤ハーモニカの寄贈を受け、セブで活用されています。地区資金にこのプロジェクトで応募し、資金援助もいただきました。

全クラブ会員は寄贈された鍵盤ハーモニカの汚れを落とし、音をだし、不調のものは分解しリハビリさせています。

私たちはセブ島支援の中でいくつかの発見をしました。一方的に与え続ける支援は、与える側の目線が高くなって尊敬欲求が生まれ、受け取る側を低く見てしまい傲りが生まれがちです。しかし Give & Take の関係で活動が進む仕組みがあるとそんな傲りは解消し、水平的な関係が意識できます。

何をいただくか?! 英語力です。フィリピンの公用語のひとつは英語です。子供たちも良く英語を話します。この英語で Skype を通して、日本の子供たちとセブの子供たちが国際理解をし国際親善を結ぶ事ができます。

セブ島の子供たちに音楽を!! 日本の子供たちに英語力を!!! という進展です。

6・7月、マクタン小学校の子供達と下諏訪中学校の子供たちが2回交流をしました。双方、話題として取り付く島を模索しています。ただいま実験中というところです。

世界各地で先進国から援助がなされています。資金を他者に委託する援助は本当に必要とする人々には10%も届かないという報告もあります。自分たちの手で援助システムをつくり援助が100%届けられるマネージメントをしていくことが良い援助に結び付くと考えています。会員の現地企業のフィリピン人スタッフが熱心に手伝ってくれています。彼らはタガログ語も英語も日本語も話します。もう Respect! Respects!! Respects!!!

（「ロータリーの友」より）

スクワーターの子供たち



マクタン小学校で練習する子供たち

# 5人の講演リレー

理事 高木 保夫

三カ月ほどの間に  
諏訪であった講演から  
抄録いたします



## 姜尚中『悩む力』

2012年5月19日(土) 岡谷カノラホール

日本名はナガノテツオであり、恩師も安曇野出身、初恋の人も長野出身で、信州は第二の故郷とすずかに語り始めた。早大博士課程の師、藤原保信先生から40年前にももらった宿題が、環境倫理学だった。人間における自由の問題、自由主義の成果と否定的な部分。

戦後民主主義が獲得した自由を、外部の力で統制してはならないと教示された。藤原先生は、まさに臼井吉見の『安曇野』の中でお育ちと感じた。

フランクは、人間は悩むことによって人間の本性である尊厳があらわれると言った。これまで悩むことが、否定的に刷り込まれてきた。日本では、自ら命を絶つ人が10万人あたり20名を超える。1日に100人亡くなっている。ベーシックなもの、人間の生命を尊重すること。個々のさやかな日常生活の中にこそ私たちの本質がある。

3. 11以降の若者はどう生きるのか、幸福はなにか、生き延びるために必要な絆とはなにか。そのヒントになる清明と気品のある90分だった。



## 養老孟司『面白く生きる道しるべ』

2012年5月24日(木) RAKO 華乃井

親戚が下諏訪に住んでいたもので、中学時代より鎌倉から霧ヶ峰や美ヶ原へ虫取りにやってきた。虫取り場であるバス終点の看板地図には、現在位置がのっていないかった。これでは、どこへ行ってよいのかわからない。

空間定位領域では、動物にはナビの矢印があるから家へ帰れると考える。人間はナビの矢印を、徹底的にエコヒキして生きている。脳も矢印のヘリがなくなって、地図全体と自分が一致するといふ気持ちになれる。矢印だけあっても、地図だけあっても、人生の意味は見つからない。人生の意味は、自分の中ではなく、人と人の中にある。

震災の現場で考えさせられたこと。絆という言葉が流行したが、裏に深い意味があると思う。急にいなくなって、絆が切れる。その次に人がつながってくる。気仙沼「森は恋人」の畠山さんは、津波でお嫁さんを亡くした。カキの作業所も流されたが、フランスレストラン協会が助けてくれた。以前ブルターニュのカキを助けた恩返しだという。ルイ・ヴィトンも、木箱を届けて助けてくれた。

生き物は全部つながっている。いわば生態系全体がつながりあっている。仏教で言えば、縁起がこれにあたる。

## 藤原正彦『我が父、新田次郎を語る』

2012年6月3日(日) 諏訪市文化センター

諏訪へは何百回目か。父は高島藩の足軽、母は笹原村湖東の百姓出身だった。

武士道精神で卑怯なことをしたら死ぬという父と、草の根を食べても生きるべしの母のもとに育った。昭和20年8月9日夜10時満州国新京(長春)で、非常召集がかかった。ソ連が攻めてくる。父は、「まだ仕事が残っている。部下を置いて家族と逃げられぬ。家族が死んでも卑怯はしない」だった。母は5歳、2歳、1か月の妹を連れて帰国する。その体験が『流れる星は生きている』となった。戦後夫婦喧嘩をすると、あなたは家族を捨てたの母の一言で、父はスゴスゴ書齋へ引き揚げた。父とはいつもケンカしていたが、死んでから尊敬する・されるのが男親。私も、父のようなよい父親になりたい。



## 第9回 身近な水環境の一斉調査が日本水大賞国土交通大臣賞を受賞しました

この調査に諏訪湖クラブも毎年参加しており、第9回の本年は6月3日（日）に沖野会長と高木理事で実施しました。天竜川の起点釜口水門より採水開始。パックテストによりCOD（化学的酸素要求量）を測定しました。天竜川、横川、小沢川、木曾川、味噌川、奈良井川で計測しました。水温は22度台から16度までさまざまでした。奈良井川には水生昆虫が豊富で、生物部OBとしては大変うれしくなりました。こうして全国2千ヶ所の同時調査が行われました。今回の受賞は同慶の至りです。

## 堺屋太一『新しい維新—今、地方の時代』

2012年7月28日（土）ホテル紅や

いま日本はえらいことになっている。1990年代より下り坂となり、5年前のリーマンショックによりさらに状態が悪化した。土地は買い手がつかず、株価も下がった。日本人はおしなべて貧乏になった。金持ちはよけい貧乏になった。経済ばかりではない、社会も荒廃している。となり近所はなし、買い物も無言となった。情報はマスコミ、お金は銀行、商品は配達を役人が進めた。世界中で飛びぬけて自販機の多い国だ。

家庭は小住宅主義。単身赴任を奨励し、親は老人ホームだ。家庭は崩壊し、夏休みの宿題は塾でやれが役人の方針だ。親を養わず、孤独死。国際的地位もG7→G8→G20と低下するばかり。

これが正しいという倫理観を失うことを敗戦と名付けるなら、第一の敗戦は徳川幕府末期だった。幕府の役人は、外国は鬼天狗と宣伝した。尊王攘夷で、黒船から維新までに10年がかかった。明治になって軍人は競争社会を実現していく。出世のためには、国よりも軍のためを思った。大正12年関東大震災、昭和10年統制経済、敗戦。ここからの国是は、アメリカと組んで経済成長をめざすことだった。経済官僚が産業を主導した。規格大量生産に向けた人間をつくった。個性と独創性はみとめない。天才を育てるよりも、平均的な型をつくる教育をした。底上げにはなった。産業経済の中枢を東京に一極集中し、文化創造活動は東京発信をすることにした。電波もキー局（東京）でないと、全国放送できない。これは日本とロシアのみだ。頭は東京であって、地方は手足。手足とはなんぞや、農業と製造業。そういう人に東京のエライ文化に似たものを聞かせてやろうが、多目的ホールだった。しかしここでは歌舞伎はできないし、いい管弦楽は育たない。この結果1980年まで規格大量生産で、日本は大成長した。しかしアジアが台頭してくる中で、日本は一気に落ち込む。世界の倫理観・情勢が変わったのに、日本は変わらなかった。もう官僚機構は限界だ。

これからどうするのか。消費者視点、地域の主導、新しい名物づくりだ。日本一のものゝ諏訪にありますよ、諏訪名物をさがしてください。そうすれば知恵が出て、経済が発展します。

## 乙武 洋匡『みんなちがって、みんないい』

2012年8月25日（土）岡谷 照光寺

立っている人と目線の合う電動車椅子で、颯爽と登壇された。早稲田大学時代出版した『五体不満足』から14年たち、2児の父親となりました。4歳の長男と、2歳の次男がいます。ぼくの場合こんな体（肘より短い腕と膝くらい足の足）ですので、息子がぼくの手伝いをしてくれます。ひげそりをしてくれ、携帯電話の皮ひもを首にかけてくれます。早起きの息子は、「お父さんメガネ」とレンズを指紋でべたべたにしながら持ってきてくれます。いまは次男へ引き継がれました。

杉並区の小学校で3年間、任期付き採用で教師をしました。担任も2年間しました。3年生と4年生です。「のび太君でも居心地のよいクラスにしたい」というのがぼくの目標でした。ギャングエイジの彼らは、不思議をなんの遠慮もなくぶつけてきます。「字はどうやって書くの?」「牛乳はどうやって飲むの?」「先生、靴のサイズいくつ?」「先生は、靴はかないから」と答えてから、女の子の表情を見て、シメタと思いました。垣根をなくすことです。障がい者ではなく、一人の人間として教師のスタートラインに立てました。

自分の一番のよさはどこにあるのか。クラスで一番絵がうまい、元気であいさつができる、あやとりがうまい、ジャニーズにくだしい。ぼくは、こんなことが得意、自分にはこんなことが向いている等々支えあっていいクラスでした。一人ひとりが完璧になる必要はありません。金子みすゞのみんなちがって、みんないいです。

おかげさまでこの体を与えていただきました。こういう体の人間だからできること、そう考えるとラッキーかもしれません。みなさんの命が、今まで以上に輝きますように。

# 農の百話 47 続・事の本質

故 松井 覺進

(この文章はご遺族 松井新様より沖野会長あてご送付いただきました)

病を得て、諏訪市湖岸通りの諏訪赤十字病院に入院中。「朝に道をきけば夕に死すとも可なり」の心境を実感している。そういう意味でベッドの上で忙しい。

「骨髓異形成症候群を背景とする急性骨髄性白血病」という難病で、歌手の本田美奈子と同じらしい。「農の百話」と題して十三年つづけてきたこの連載は、百話に達しないうちに息絶えるだろう。

『風立ちぬ』の富士見高原の二反八畝（八百六十坪）は、無償の自然農法園として貸すことにした。土は豊かに出来あがっていて、ミミズやツチガエルも繁殖しており、こういう農園を評価する人もいる。「四、五十坪単位で週末農業をしたい」という定年直前の希望者も何人かでてきた。管理は、ハーブ園を経営する若い人にまかせている。週末に家族で野良仕事を楽しむドイツのクライン・ガルテンのような姿を描いている。

前面は南アルプス連峰。中央に甲斐駒ヶ岳が彫刻された山塊のようにガガとそびえ、畑の斜面をたどると八ヶ岳。畑は八ヶ岳の山麓の裾に位置している。三方は森。農業振興の特別地域だから、住居は建てられない。畑から二、三分下ると、日量三百五十トンの湧水がある。風光明媚。土産物産屋が軒を並べる喧騒地には、ここを耕して二十一年、一度も行ったことがない。一九九一年—一九七年末まで私も週末農業だった。定年退職後の九八年から実質移住。『風立ちぬ』の時代にはなかった温泉が三カ所わいている。

空気と水は所与の要素として、農の本質は土にある。土作りに昔から熱心だったのは、熱海市に本拠を置く世界救世教だ。この宗教は自然農法の農家が主体だ。宗教といっても、信仰はあるけれど、墓はもたない。墓は、他の宗教でもキリスト教でもご自由にという宗旨。半分は生き方の哲学を示す組織のようにみえる。

開祖の岡田茂吉は、畑を耕すのに深耕法を唱えた。深く掘れば掘るほどいい、というのだ。ところが、表土に近いところに土の栄養分があることがわかり、深耕法は批判され、今は微生物の塊りのEM菌を使って生ゴミ、

糠、藁などを発酵させたりする農法が主流となっている。EM菌を水に一晩入れて菌を培養したりもする。しかし、私は土作りという観点からみれば深耕法を全否定できないと思っている。

開祖、岡田茂吉から三代目になって、教団の中の政治家がうごめき、自民党の候補を応援したり、自ら国会議員を出したりして、二百数十億円の穴をあけてしまった。その結果、教団は三派に分裂。二十年余の紛争が続く。この間、信者でない私は救世教と縁が切れた形になった。あとで復縁したとき、農業指導者はすまなさそうにいった。「恥しくてお付き合いができなかったのです」。教団は、岐阜県恵那市郊外に、実験農場と研修施設があって、私と妻はそれぞれ二十数人の研修生を前に講演したことがある。信者たちの農作物は芸術品かと見間違えうほど第一級の品質である。

私の病気であるが、血液内科のどの医師も「原因不明」という。免疫療法系あるいは自然医学の医師も、本質はわからない。最初に行った諏訪中央病院では「貧血のひどいの」という見立てで、出血原因を調べるため、胃カメラや腸の内視鏡検査を予定し、鉄剤を処方した。これはまったく見当ちがいで、「ホウレン草がいいわよ」とわかったようなことを気軽にいう素人判断と大同小異である。さすがに二日目から誤りに気づき、血液内科のある諏訪赤十字病院にまわされたというわけ。

血液内科の医師が異口同音にいうのは、放射線被曝との因果関係はあるということ。ヒロシマ、ナガサキ、ユタ州やネバダ州、放射線を扱う医師、さらにビキニ環礁などの住民など、すべてが調べられたわけではないが白血病とつながることがあるということである。

そこで、私は自分をモルモット視して、病気の本質と体験的に考えられることを三つ挙げておきたい。

一、一九九一年夏、アメリカが一九五八年まで原水爆実験をしたマーシャル諸島のエニウエトク環礁とビキニ環礁を一カ月ほど取材した。なかでも、アメリカによる

核のゴミ捨て場となったルニット島に三十分余り上陸、被爆した。ガイガーカウンターは、ONにするとうるさく鳴ったし、「立入禁止」の看板が上陸地点に掲げてあった。避難していたビキニ本島の住民は、アメリカの安全宣言を信じて帰島したものの、尿からプルトニウムが次々と検出され、再び流浪の民となったと、そのとき聞いた。ビキニ環礁には住民は一人もいなかった。本島ではヤシやパパイアなどの放射能調査のため、白人が二、三人交替でいるだけだった。さらに、第五福竜丸だけでなく、日本のほかの漁船員も多数、後年ガンに侵されていることが一高校教師の追跡調査で判明、四国の南海放送だけが放送した。つまり、原発報道は偏っていて、フクシマの人の大半は、このことを知らない。四基の事故原発のうち、どれがプルトニウムを再利用しているプルスーマルなのか、地元の記者すら当初は知らなかったのだ。

二、ヘモグロビンが普通の人々の半分程度に落ちたので、手足、男根の先などは白っぽくなって血がまわらないことを示していた。頭の中もおそらく同じ状態なのだろう、いわゆる血の巡りがわるいということがわかる。将棋の棋譜や数独（ナンバープレイス）を解く速度もきわめて遅く、何時間もかかることがある。初心者以下である。しかし、それ以外の肝・心臓・腎臓・胃腸はまったく問題なく、「化学療法をガンガンやれるということですか」と問うと、医師は「そういうことです」と答えた。不安になった私は、医師とやり合うとケンカになるので、薬剤師のトップを呼んで「体に疾患のある方並みにゆるやかに心がけて下さい」と頼んだが、効果があるかどうか。

人体の造血機能へは、普段の生活で注意を払わなかった。「抜かった、しまった」と反省している。白血球・赤血球・ヘモグロビン・血小板に問題が生じた。「抜かった」という実感は、農作業が過労だったことだ。農家があきれられるほどだった。心配してくれた人が私をコーヒーマイクに呼んでくれたこともしばしばだった。家に帰るのは暗くなってから。食事をしてボタンキュー。出版の約束のある本も書けない。

三、次に「抜かった」のは、標高一二五〇メートルに住みながら寒さストレスに無頓着だったことだ。『血液とガン』という著作を一九六六年に著した森下敬一博士に病気になってから相談したが、寒さストレスは血液系のガンには大敵なのだ。青森、札幌に勤務し、ヒマがあればスキーに出かけたころの感覚「寒さに強い」を引きずっていたのだ。

もう一人の石原結実博士（男性）は「体を温める」「胃腸を丈夫に」「VB12」の三点を忠告してくれた。彼が主催する伊東市郊外の保養施設に入ると、部屋に生姜の飲み物が絶えず置いてあるそうだ。



原因不明なのに治療法があるというのも、変な話だ。必ず物事には本質があるはずだ。病気の体験者が、それぞれ仮説でいいから究明すべきだろう。

山笑ふ 賦活免疫 信じ生く



## 理事会報告

- 第48回 日時：平成24年6月17日（日）10:00~12:00  
 場所：スマートレイク事務所  
 出席者：沖野、金子、宮坂、宮原、長崎（功）、八幡、市川、高木  
 内容：  
 1. 信州ネットsuwaの活動経緯について  
 2. クリーン祭りについて  
 3. 夏期貧酸素化防止対策について  
 4. その他
- 第49回 日時：平成24年7月22日（日）10:00~12:00  
 場所：スマートレイク事務所  
 出席者：沖野、長崎（政）、高木、宮坂（平）、宮原、長崎（功）、八幡  
 内容：  
 1. 豊田下水処理場への太陽光発電パネル設置に関する対応について  
 2. 諏訪湖クリーン祭（9月9日）出店について  
 3. 諏訪湖第6期湖沼計画策定について  
 4. 諏訪国際交流協会ヨーロッパ姉妹都市訪問（6月23日~30日）報告  
 5. その他

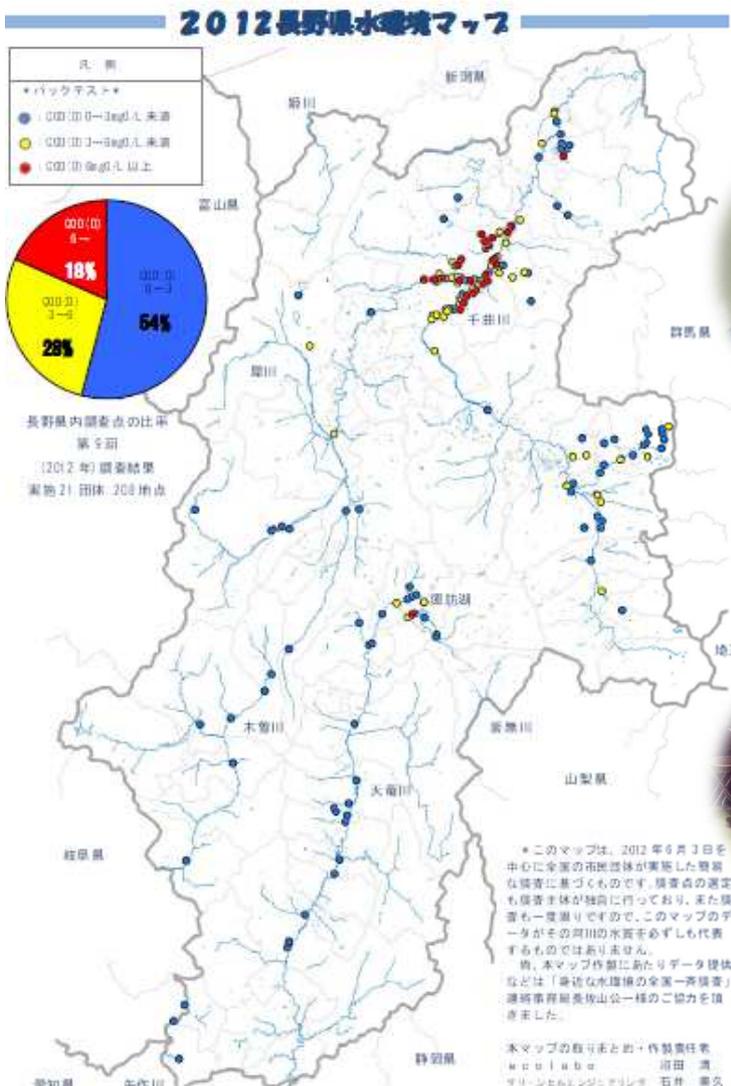
# 信州環境フェア

8月25日26日と二日間にわたり  
ビックハットにて行われました

「2012年信州水環境マップ」展示及びパックテスト体験会が出来ましたことご報告申し上げます。

第九回目の県内 208 カ所の水質調査結果を皆さまに発表出来ましたこと、並びに、パックテスト試験を 25 日 61 名、26 日 63 名の方に体験していただくことが出来ました。調査結果発表は参加者にとって嬉しいことであり、また、来年の参加者増に拍車がかかることと存じます。

来年は早くから準備し、仲間にも広く告知したいと思いますので宜しくお願い申し上げます。



(文章と写真提供: 御代田町 沼田様)

信州水環境マップネットワーク  
<http://shinsyu-mizumap.midorinooka.net/>  
 2012年 長野県水環境マップ  
[http://shinsyu-mizumap.midorinooka.net/katsudou/shinsyu-mizumap\\_2012\\_A4\\_P1.pdf](http://shinsyu-mizumap.midorinooka.net/katsudou/shinsyu-mizumap_2012_A4_P1.pdf)

企画・編集・発行 諏訪湖クラブ事務局  
 TEL/FAX 0266-58-0490 E-mail e-suwa-info@lake.gr.jp

## 諏訪湖クラブニュース

No. 15